お薦めの一冊

『雇用差別と闘うアメリカの女性たち
最高裁を動かした10の物語』

ジリアン・トーマス 著　中窪裕也 訳　日本評論社　3,520円（税込）

歴史を動かした「勇気」

会員　弘中　章（61期）

アメリカ合衆国の連邦法には有名な1964年公民権法という法律がある。その第7編は「タイトルセブン」とも呼ばれ，採用から解雇まで雇用の全局面について「人種，皮膚の色，宗教，性，または出身国」による差別を禁止している。本書は，このうち「性による」（because of sex）差別を禁止する規定の適用が問題となった10の裁判を描いた書である。

10の裁判にはそれぞれ主人公がいる。画期的な裁判の原告となった女性たちである。例えば，「男の仕事」と考えられてきた警察や刑務所の仕事に就くために州を訴えた女性，セクハラ被害に声を上げて「セクハラは性差別である」と裁判所に認めさせた女性，「女性らしくない」というステレオタイプを理由に会計事務所のパートナーへの昇進を拒否されるもこれに異議を申し立てた女性などだ。

彼女たちはみな，普通に働きたい，正当に評価されたいと願うだけだった。そこに立ちはだかった性差別の壁を乗り越えようと，裁判を起こし，最高裁まで闘った。彼女たちの努力の結果，性差別禁止の法理は保障内容を具体化し，豊かさを蓄えていったのだ。こうした闘いの物語を通じて，読者は，アメリカにおける雇用平等法理の発展の歴史を学ぶことができる。

裁判を描いた書だからといって，本書を，堅苦しい法律書と思うことなかれ。それぞれの物語が，みな生き生きと，情熱的に描かれている。理不尽な現実を前に立ち上がった原告と，難しい裁判と分かってこれを引き受ける弁護士。そのプロフィールや，個性的で実に魅力的な発言がちりばめられ，当事者や弁護士の生き様が味わい深く語られる。各所に登場する裁判官の面々も個性豊かだ。読者は，主人公と脇役たちに親近感を抱きつつ，流れるような名訳によって，第一級の法律ドラマを気軽に楽しむことができる。

一方で，本書を弁護士が読めば，おのおのの業務経験から，また違った感慨を得られるかもしれない。

弁護士が事件を依頼されるとき，事務所経営を考えながら受任するかどうか判断せざるをえない。不正義を訴える相談者の声に耳を傾けながら，理論は立つが前例がないとか，解決まで時間がかかりそうだとかで，受任に躊躇を覚えることがある。もちろん相談者がかわいそうに感じられるし，その期待に応えたいとも思う。その間で悩む。本書でも，同じような悩みを抱える弁護士たちが出てくる。中には，引き受けたはいいが，いつまで経っても裁判の結論がでないので弁護士報酬が入らず破産寸前になったという苦労を経験した弁護士もいる。依頼者に寄り添う大変さは，アメリカの弁護士も日本の弁護士もそんなに変わらないと思えてくる。

ただ，本書が示しているのは，弁護士が覚悟をもって相談者とともに歩むことを決め，その先の道を歩み切ったとき，歴史が前に進むことがあるということである。その歴然とした事実を前に，深い感動が生まれる。

こうして本書は，日々忙しい中にあっても依頼者とともに一歩踏み出す勇気を忘れないことの大切さを，私たち弁護士に再認識させてくれる。より多くの会員の皆様に本書を手に取っていただきたく，紹介の文をしたためたゆえんである。